

# 咲き誇れ花々よ

生涯で自信のもてる花一枚が描ければと思っているの。私の見た、感じた、表現した、私の分身の花を。その一枚のために何千枚も試みて生きてゆこうと。(注1)

## 花の絵に込めた想い

1925(大正14)年、第3回春陽会展に20歳で女性初の入選を果たした三岸節子。画壇デビューを飾った四点の入選作は、《自画像》(No.1)のほか、花、静物、風景でした。以来、節子は何百枚、何千枚という花の絵を描き続け、いつしか花は節子の代名詞となります。

節子の花の絵は、大半がただ「花」とだけ名付けられています。節子は花を見たままに描くのではなく、実体を捉え、自分の中で消化し、“花よりもいっそう花らしい”自分自身の分身として描きました。そのため、作品名は何の花ということはないのです。そのときどきの心の機微を塗り重ね、生命を注ぎ込んだ花。亡くなる直前まで、生涯で自信の持てる一枚の花を追求し続けました。



仏・ヴェロンのアトリエの庭で花を育てる三岸節子  
©MIGISHI

## さくらがさいた

数多くの花を描いてきた節子ですが、日本を象徴する花である桜だけは、若い頃は描くことができなかつたといえます。桜について、節子は「ぱっと咲いてぱっと散るから、人はみな潔ぎのよい花だと思っています。しかし、桜の花は命が短いから、むしろ生命への執着、執念はただごとではありません。(中略)生命に執着し、執念を燃やす怖さが描けなければ、本当の桜を描いたことにはなりません」(注2)と語っています。

節子が桜と正面から対峙したのは、じつに90歳を目前にしてのことでした。1992(平成4)年、節子は脳梗塞を患い、左半身に麻痺がのこりました。同じ頃、自身の生家跡に美術館が建つことが決まると、「今の自分なら桜の美しさだけでなく、生命に執着する怖さも描くことができる」と、美術館の開館に向け、数年がかりで最後の大作《さいたさいたさくらがさいた》(No.22)を描き上げたのです。



大磯のアトリエと《さいたさいたさくらがさいた》のモデルとなった山桜の大木

## 武田薬品 美術コレクション【2021年寄託、初公開】

武田薬品工業株式会社社長の六代目・武田長兵衛は、洋画家・小磯良平(1903-1988)と戦前から親しく交流を持ちました。同社が蒐集したコレクションには、小磯良平作品を中心に、小磯と共に新制作派協会で活動した荻須高德や三岸節子らの作品が含まれています。これらの作品は長く社外に出ることがありませんでしたが、近年積極的に作家にゆかりのある美術館に寄託され、公開されるようになりました。

当館には2021年に3点の節子作品が寄託されました。そのうち《すはだ》(No.26)は、1960年代に同社が販売していた“素肌づくり”専門化粧品「ビネラ」の広告のために制作されました。節子は雑誌『婦人公論』1961(昭和36年)1月号から連載開始した「美容コーナー」(武田薬品提供、東京女子医科大学皮膚科教授・中村敏郎著)の挿絵を担当し、翌年9月号には連載をまとめた小冊子「すはだ」が付録として配布され、《すはだ》が表紙を飾りました。ほかにも武田薬品は、節子の四季折々の花の絵を綴ったミニチュアカレンダー「ビネラ花ごよみ」を作成し、女性誌の読者プレゼント等に活用しています。

「ビネラ」の広告では、節子自身もビネラ愛用者として登場しています。女性洋画壇の象徴的存在として、作品だけでなくその美意識や人物像も注目されていたのでしょう。

(注1) 三岸節子画文集『未完の花』1994年、求龍堂、94頁

(注2) 吉武輝子『炎の画家 三岸節子』1999年、文藝春秋、379頁